

〈論文〉

札幌大学孔子学院の中国語講座の開設策略について ——初級・中級の授業展開の仕方を中心に——

張 秀 強

札幌大学孔子学院の汉语教学不同于日本大学内设置的汉语共通课，也有别于中国国内大学针对留学生的汉语教育，更不是日本大学内的汉语语言专业。其立足于本地，服务于社会，提供作为终身学习平台的性质，使得我们必须探索一条独特而有针对性的、适合于孔子学院现状的汉语教学方法，并需要及时依据学员需求，科学、灵活地设置课程。本论文在回顾札幌大学孔子学院建院历程的基础之上，结合同仁及本人教学实践，初步探讨了双语教学与直接法在不同学习阶段的综合利用。

- 一、札幌大学孔子学院の現状
- 二、授業様式が定着するまでの経緯
- 三、直接法＝「オールチャイニーズ」授業様式の利点と限界
- 四、会話重視の中国語講義を目指すためには
- 五、現時点の反省点と解決策

筆者はこの度札幌大学孔子学院で中国語を教える機会に恵まれた。最初は暗中模索と試行錯誤を重ねながらの中国語講義となったが、任期の大半を経た今では、少しずつ慣れを感じるようになった。一方、日々受講生と接している中で、会話能力の向上、文法知識の解釈、中国文化の紹介、受験対策など、多様なニーズに応えなければならないとも実感している。ここで前期仕事のまとめとして、札幌大学孔子学院で中国語講義を担当する際感じた問題点を取り上げ、札幌大学孔子学院の中国語講座の授業様式及び開設策略を論じてみたい。

一、札幌大学孔子学院の現状

札幌大学孔子学院は2006年11月22日に発足し、日本国内では5番目、北海道では初となる「孔子学院」である。中国国家漢語弁公室（略称「漢弁」）の管轄の下で、パートナー広東外語外贸大学と共同で運営している。設立以来、着実な成長を成し遂げ、現在210名前後の受講生を確保し、入門Ⅰ～Ⅲ、初級Ⅰ～Ⅲ、中級Ⅰ～Ⅲ、上級、「観光・ガイド中国語」、「北海道限定通訳案内士受験対策講座」など語学講座以外に、「カンフー・気功演習」、「源氏物語の女君における漢籍の影響」、「論語を読む」、「三国志を読む」など中国文化講座も含めて、22個の講座を開講している。受講生の特徴は、前任講師である沈林氏の論文「浅論海外社会漢語教学的策略」では、受講生のメンバー構成が多様、年齢差が大きい、語学力のバラツキ、中国語学習歴、学習意図がまちまちであること、途中退学など学習の随意性などが挙げられていたが、上述の状況は基本的に開校二年目になっても同じである。^(註1)

中国文化・語学講座以外に、札幌大学孔子学院ではまた有料セミナー、定期無料講演会、「漢語橋」スピーチコンテスト、中国語教員短期研修プログラム、HSK漢語水平考試^(註2)などの事業も展開されている。2008年度では、設立一周年の国際シンポジウムが開催され、日本国内孔子学院の代表を始め、韓国、シンガポール、オーストラリアの孔子学院代表が一堂に会し、孔子学院の発展について十分な意見交換がなされ、「人民日報海外版」でその活動が報道された。^(註3)2008年8月6日～8月8日、国際文化フォーラムとの共催で高校中国語教師研修を実施し、北海道地域で中国語を教える日本人教師12名を集めた。また、2008年10月実施の「孔子のふるさとを訪ねる旅」も成功を収めた。

2008年12月9日、第三回孔子学院大会が北京の人民大会堂で行われ、劉延東^(註4)は講演で孔子学院設立の主旨を「世界各国人民が中国語を学習し、中華文化を理解する園地、中国と外国文化の交流の場、中国人民と世界各国人民との間の友誼と協力を結びつける架け橋」と述べた。また、同氏の講演内容によれば、現在世界78カ国と地区の中で、既に249校の孔子学院と56校の孔子課堂が設立されていて、登録の受講者は13万人に達しているということである。^(註5)札幌大学孔子学院はこうした背景の中で、北海道地域の人々に中国語教育を提供すると共に、中日両国民の相互理解の窓口として努力をしている。

二、授業様式が定着するまでの経緯

2008年4月、筆者は沈林氏の後任講師として来日し、5月10日スタートの春学期から正式に中国語講師として教壇に立った。赴任するまで、筆者は中国の大学で基礎日本語を教えた経験があり、携わる言葉こそ違おうが、外国語習得に共通の心得を持っているつもりであった。それでも、実際に受講生のレベルを配慮し、試行錯誤を重ねて授業の様式を自分流に定着させるまでは、一学期の教学実践を要した。

前任の沈林氏は中国語を担当するベテランであり、対外漢語教育の専門家でもある。ただ沈林氏は日本語がほぼ話せないことがあり、授業はやむなく中国語で実施するという一面があった。実際、春学期スタート前の語学講座レベル相談会に出席して、レベル相談に来た方々の声を聞くと、講座説明用のパンフレットに書かれてあった「原則的にすべて中国語で授業をします」というフレーズは「中国語の会話がいっぱい学べるぞ」という宣伝効果がある一方、受講したい人たちに不安を抱かせる材料となった部分もあるようである。それで春学期では、初級クラスの授業は中国語と日本語が半々の講義となり、中級のクラスでも全体として中国語を使うとしながらも、必要に応じて日本語での解釈も取ることにした。

8月3日で春学期が終了し、秋学期へ向けて受講生募集のため再スタートを切ったが、去年の場合、秋学期には受講生の数が激減という先例があり、受講生が集まるかどうか、孔子学院にとっても筆者にとっても一つ大きな試練であった。結果は喜憂半々で、初級中級の六つのクラスは一応無事開講となったものの、初級Ⅱから初級Ⅲへ、中級Ⅰから中級Ⅱへというように受講生の激減があった。また、結果から見れば、初級Ⅲから中級Ⅰへの進学が多いかのように見えるが、実際は新規に加わる受講生が殆どで、初級Ⅲから中級Ⅰへ直接上がる受講生はわずか2名であった。具体的な進級状況は以下表1の通りである。

表1：

2008 春学期	入門Ⅲ	初級Ⅰ	初級Ⅱ	初級Ⅲ	中級Ⅰ	中級Ⅱ
	14	15	15	6	14	9
2008 秋学期	初級Ⅰ	初級Ⅱ	初級Ⅲ	中級Ⅰ	中級Ⅱ	中級Ⅲ
	12	12	10	12	8	9

(ただし、個人的な都合で、都合が良い時間帯の講座へと移動する受講生や、途中から初級Ⅱ、中級Ⅰに入る受講生もいて、上の一覧表は講座の元メンバーの単純進級ではない。)

札幌大学孔子学院では、毎回の講義後に、アンケート調査が実施されており、この制度の保障により、講師は受講生の声をいち早く聞くことができたが、受講生の進級しない理由は、アンケートでは調査できなかった。確かに、客観的には授業の時間帯調整による不都合（例えば、初級Ⅲから中級Ⅰに進級する場合）などの原因も考えられるが、一番の要因はやはり授業の難易度にあるだろうと考えられる。一例で言うと、春学期中級Ⅱで勉強するK氏は会話力がクラスでは上であるにもかかわらず、中級Ⅲへの進級を諦めたのは、授業中日本語による説明が多すぎで、講義内容に対して物足りなさを感じたからなのではないかと反省している。また、逆の例であるが、中級Ⅰから中級Ⅱへ上がる受講生は元メンバーの14名から8名に留まり、教科書の内容が難しくなるにつれ、だんだんついて行けなくなり、途中で挫けたということも考えられる。

以上の経験と教訓を生かし、秋学期の初級講座では日本語で説明する姿勢を貫きながらも、会話練習をより多く導入することに力を入れてみた。また、中級講座では、受講生の会話力が一段と上ということもあり、講義はすべて中国語でするように心がけ、また初級講座と同じように、受講生に中国語で発表させる機会を増やしてみた。アンケートを見る限りでは、春学期よりは満足度が若干高いようである。従って秋学期に入ってから、初級「中国語と日本語による双語教学法」、中級「オールチャイニーズの直接法」の授業様式を漸く定着させたのである。

三、直接法＝「オールチャイニーズ」授業様式の利点と限界

一般的に外国語教育において、直接法のメリットは以下のように考えられている。(1) 聴力、会話の向上に有利である。(2) 母国語への翻訳を介さずに、外国語で外国語を理解するから、外国語で思惟する習慣の養成には有利である。(3) 文法知識より会話優先のことである。^(注6)

私事ではあるが、筆者は大学で日本語を勉強した時も、直接法の体験者の一人である。実際、のちに筆者はこの経験を直接法を経験していない人に話すと、「アイウエオ」さえ勉強したことがないまま、本当の意味でのゼロスタートの学生に対して、直接法とは無謀に近い教育法ではないかと理解に苦しむ人もいた。ただ直接法の教育を受けた筆者にとっては、「直接法」は一概に否定するものでもない。例えば、五十音図の習得段階では、学生が授業では先生とテープの発音を模倣するだけでいいし、また五十音図をマスターした後、授業の目標は「精講多練」（講釈は精練にして、実践練習を多く取るという意）であった。講義内容の多くは発音チェック、言葉の言い換え、文型の置き換えで、教師の役目

は練習の組織者であった。

ただ、このような直接法が学校で実施される前提はカリキュラムの多コマ数の確保であることは言うまでもない。^(註7) また、よく言われるのは予習よりも復習が大事だということであった。放課後でも、膨大な時間と精力を投入しないと、当日勉強したものを覚えられない状態であった。筆者の大学時代は週五日間制で、ほぼ毎日三コマ以上の日本語講義である。一番多い時は、一日中朝八時から午後の五時まですべて日本語の講義（内容は精読や聴力、会話など）である場合もあった。先生の講義についていくのが精一杯で、午後の四コマの講義に入る時は、疲れ果てて吐き気を催した経験さえある。

一方、参考資料の札幌大学孔子学院のカリキュラムを見て分かるように、殆どの受講生の講義は、週に一回でしかないのが現状である。また、社会人がメインであることもあり、残業や出張や他の事情で、復習時間や学習時間もかなり制限されている。さらに、初級のクラスに入ったと言っても、受講生のそれまでの勉強時間も限られていたので、いきなり中国語の海に投げられたら、すぐ挫けてしまいそうである。このような事情を考慮し、孔子学院の受講生とカリキュラムの現状を考え合わせれば、直接法の講義実施は少なくとも初級クラス段階では無理があると言わざるを得ないだろう。

四、会話重視の中国語講義を目指すためには

以上の分析で分かるように、直接法による講義は確かに利点があるが、孔子学院の実情には合わない部分がある。ところが、受講生の声を聞くと、一段と共通して願っているのは、会話力の向上である。そのニーズに応えるためには、以下のことを教案作りや授業運びの際、配慮すべきではないかと考えられる。

(1) 初級クラスでも、中級クラスでも、受講生の中国語による発表機会をなるべく多く与えること。その際、発表の形式を工夫すべきである。^(註8) 例えば、初級Ⅰの学習者に対して、自分で考えて文を作らせる練習より、文型に倣って、置き換えと言ひ換えの練習は効果的であろう。また、“你最怕什么？”、“你在做什么”、“你要去哪儿？”、“你上哪儿去？”みたいに、簡単な質問であるにしても、新しく勉強した単語を生かして反復練習をさせて、中国語を使って会話をさせる練習も大事である。一方、中級クラスでは、一分間スピーチの練習を導入してみた。これは毎回の講義の終わりに、受講生に口頭の宿題として“幸运的事”、“对09年的期望”、“介绍你的一个朋友”などのようなテーマを与え、予め下準備をしてから授業の時発表をさせ、先生がコメントし、或はクラスメートが質疑をし、発表者が応答するという練習法である。また実際旅行の場面を想定した“打电话告诉

“服务员你忘东西在宾馆里了”というような課題を与え、授業の際、教師が“服务员”を演じ、受講生が“忘东西的旅客”を演じて対話をするという練習法も取ってみたことがある。

(2) 発表者の話す意欲を最大限に引き出し、またそれを奨励すること、発表者に不安を感じさせる材料をなくすこと。例えば、講義では講師が発音チェックや文法的なミス指摘するが、あまりに厳しくしすぎると、逆に学習者にプレッシャーを掛け、発表意欲を奪ってしまう結果につながる。そうかと言って、ミスをそのまま放置するのもいけないから、ここで度を把握することが大事であろう。

(3) 若干遅れている受講生への対応。一つのクラスに、発音なり、単語量なり、会話能力なりと、若干遅れている受講生が常にいる。遅れている受講生をサポートするために、必要以上に日本語で説明をしてあげたり、中国語のスピードを極端に落としたりすると、逆に出来る受講生にとって物足りない要素となる。「因材施教」(学生の力に応じて指導をする)を心掛けながら、全体の均衡を把握することが大事であろう。

(4) 受講生の興味を引く素材の用意。どんな会話をするか、用意された素材次第で、授業の雰囲気は全然違ったりする。筆者は一度試しに中国の漢詩「楓橋夜泊」を初級Ⅱのクラスに導入してみた。そして全員に朗読させるだけではなく、暗誦までさせた。ところが、次の講義の時間になると、全員は見事に暗誦でき、しかも暗誦できたことに達成感を味わった受講生もいて、授業後のアンケート調査にそれを書いたのである。続いて、紅葉の季節に合わせて、杜牧の「山行」を受講生に紹介し、これも暗誦させたが、みな唐詩に含まれる心地よいリズムと風韻に浸り、興味津津にやってくれた。ただ、過ぎたるはなお及ばざるが如し。漢詩の授業ではないので、あくまで紹介の程度にとどまった。ひとつの形式だけだと、どうしても飽きてくるから、その他の素材も用意する必要がある。

例えば、中国春節の“春节联欢晚会”のビデオである。これも予想以上に受けがよかった。日本のお正月に行われる紅白歌合戦と引き合いに、授業で中国の旧正月の番組「春節聯歡晚会」を五分間程度放映したが、場面の迫力、舞台の華やかさなどは受講生にとって、新鮮そのものだったようである。また、天安門の「金水橋」について説明をする時、実際に写真で確認して初めて皆さんが納得するということもあった。いずれにしても、面白く感じて初めて皆が質問なり議論なりをするし、中国語会話へとつながるから、会話素材の用意と同時に、会話を引き出す背景となる材料の準備も大切であろう。

五、現時点の反省点と解決策

現在、札幌大学孔子学院は着実に成長しているが、成長に伴って多くの課題にも直面し

ている。中国語講座の開設に関して、以下の反省点が浮上している。

(一) 教 材

札幌大学孔子学院の初級コースで使われる教材は「快樂学漢語」(徐菊秀 編著, 英日文注釈本, 北京大学出版, 2002年1月)で、これは札幌大学孔子学院が開校当初から使ってきたものである。この教科書は中国で出版され、留学生向けの教科書であるが、札幌大学孔子学院の受講生は中国で留学する日本人の留学生と比べて、言語の環境、カリキュラムの違いなどソフトの面において、大きな違いがあり、授業の実施を通して、以下の反省点が既に出ている。(1) ミスプリントが多い。特に、品詞の間違いなど目立つ。(2) 本文にはピンインがないことである。(3) 音声テープのスピードが早すぎ、到底初心者向けではない。(4) 印字が小さい、年配者の受講生が判読に苦しむ。

一方、中級コースの教材は北京語言大学出版社の「説漢語」(日文注釈本, 吳叔平主編, 1999年4月第2版)であるが、これも以下のような問題点を抱えている。(1) 版が古すぎ、内容の更新が必要。1999年の出版であるが、例えば電話の内容を伝える第十四課“我一定转告”では、まだ携帯電話どころか、留学生宿舎には電話が取り付けられていないという時代設定をしている。まさに二十年前の中国事情であるが、今その事情を受講生に改めて説明するのは確かに面白さはあるが、現実には合わないのである。(2) 会話の不自然さが目立つ。一例で言うと、第二十二課「我属猴」に中国人が中国の十二生肖を外国人の友達に紹介する会話があるが、“鼠, 牛, 虎, 兔, 龙, 蛇, 马, 羊, 猴, 鸡, 狗, 猪”と紹介したあと、すぐ相手に“记住了吗? 你还应该记住它们的顺序。”と聞き、相手の外国人もいきなり“记住了”と返答する。(「説漢語」134頁)十二生肖の風俗習慣がある日本では大丈夫だが、相手が西洋人であったりすると、一回聞いただけでは十二生肖を覚えてしまうことはどう考えても不可能なことである。(3) この教科書には音声テープがついているが、版が古すぎることもあり、中国国内においても入手困難な状態である。以上の事情を反省して、冬学期から中級Ⅰのクラスで、最新版上下二冊の「説漢語」(CD付き, 2008年5月第3版)に変更をしている。

(二) 講座名称の工夫

現段階の募集状況を見れば、入門、初級、中級のコースに学習者が集中しすぎのようである(表2参考)。例えば同じく初級のクラスで講義を受けていても、一学期終了時、中級のステップに上げられるならまだいいが、上げられない受講者のためのコースを考えるべきであろう。同様に、上級に進級できない中級受講生のための講義も考えていくべきであろう。というのは、週に一回の講義で、勉強時間もかなり制限されている状況の中で、一学期十二回の講義で、語学力の向上において質的な飛躍は望めないからである。

表 2 :

	入門	初級中級	上級
2008 春学期 受講生人数	50	59	12
2008 秋学期 受講生人数	53	63	8

ここで、一つ考えられるのは、中級、上級の講義名称からもたらすハードルを解消する工夫である。実際、春、秋、冬学期四回に及ぶレベル相談会に出席して、一つはっきり感じ取られるものは、多くの受講生が中級、あるいは上級のクラスに進級する力を有しているながら、その中級、上級という講義名称を見ただけで、「難しそう!」と思う受講生の気持ちである。従って、各講座の名称を決める際、例えば、中級、上級と命名せずに、「応用中国語会話」や「実践中国語」などと命名するように、もう一工夫が必要であろう。

(三) サテライトキャンパスの効率的利用

現在、札幌大学孔子学院では春(5月～8月)、秋(9月～12月)、冬(1月～3月)というように、三つの学期でカリキュラムを組んでいる。春学期終了時、受講生の一部から休みによるブランクが長過ぎとの意見が出ているが、生涯学習をサポートする教育機関の性質を考えると、サテライトキャンパスの効率的利用を検討すべきであろう。

(四) 開設講座の多様化

一般的に外国語学部の共通科目と言えば、精読、汎読、ヒヤリング、文法、会話、読解、翻訳などのものだが、札幌大学孔子学院の場合、外国語学部の性質と違うこともあり、これらの講座形式をまだ導入していない。でも、長期的に考えれば、以上のようなオーソドックスなものも徐々に取り入れる必要があるだろう。少なくとも、「会話」授業の導入は、現段階でも必要であろう。

(五) 修学旅行など実践的な活動をもっと取り入れる

2008年10月企画した学院長と行く「孔子のふるさとを訪ねる旅」は、北京、済南、曲阜、臨沂、青島、北京の順に、10月18日から10月25日までの7泊8日で実施した。一行の16名は、学院長の引率で孔子廟、孔府などを見学し、曲阜師範学校を訪れ、さらに青島でビール工場を見学し、北京の孔子学院本部では英国中学生との出会い、そして一言の中国語自己紹介などで大いに交流することができた。

ツアー参加の全員に感想文を書かせ、中には「こんかいのたびは、中国への想いを改め

て確認する旅となりました。五千年の歴史を有する中国という国への憧れと、そこに住む人々へのさまざまな想い、同じアジア人だという親近感を感じつつ、人と人とのふれあいに想いを残して帰って来た旅でした」と旅行の意義を振り返る感想文がある。

また、孔子学院本部への表敬訪問をして、こう感想を述べたメンバーがいる。

「お名前は失念したが、日本担当の30歳台の男性事務局員が応対してくれた。

小柄だが常に笑顔絶やさず、片言の日本語でテキパキした応対は好感が持てた。

帰りのバスの出発まで手を振って見送りしてくれるなど、とても政府のお役人とは思えなかった。

又、館内の中国の歴史、伝統文化、工芸美術品などを紹介展示しているコーナーを案内してくれた女性職員の応対も素晴らしかった。」^(注9)

「百聞は一見に如かず」。孔子学院の仕事を理解する意味でも、異文化理解の意味においても、こうした草の根の交流を推進することは孔子学院の仕事の一環で、今回の旅行の成功を契機に、こうした民間活動を大いに推進していくべきであろう。

ま と め

本論文では、札幌大学孔子学院の中国語講座の教学実践を通して、中国語教育実践の最新の動向を参考に、札幌大学孔子学院の現状に即した中国語講座の教授法のあり方を検討してみた。札幌大学孔子学院の中国語教育は、日本大学のカリキュラムにおける一般教養科目としての中国語教育とは違うし、また中国大学の外国人留学生に向けた中国語教育とも区別する、さらに、中国語学科のような専門学科でもない。その地域社会に根ざし、社会人向けの生涯学習の場としての性質は、札幌大学孔子学院の独自で現状に即した教授法の模索を要求する。と同時に、講座の開設も、合理的かつ柔軟に受講生のニーズに応えなければならない。以上の提言は後任講師及び関係者の皆様に参考の一材料となれば幸甚である。

注：

- (1) 沈林、「浅論海外社会汉语教学的策略」、『札幌大学総合論叢』第25号、2008年3月。
- (2) HSKとは、中国の教育部（日本の文部科学省に相当）が設けた「漢語水平考試」の発音（Hanyu Shuiping Kaoshi）の頭文字の略称で、中国語を母国語としない中国語学習者のための唯一・公認の中国語能力認定標準化国家試験である。
- (3) 張偉雄、「日本 札幌大学孔子学院召開一周年記念国際研討会（孔子学院）」2008年7月7日、『人

民日報海外版】第6版。

(4) 劉延東：中華人民共和國國務委員，孔子學院總部理事會主席。

(5) 中國教育新聞網，中國教育報，2008年12月11日報道。

http://www.jyb.cn/china/gcdt/200812/t20081211_217576.html

なお、孔子學院の意義について、張偉雄「語言文化教育與國際貢獻」という論文の中で、「無論對內對外，孔子學院都是反饋世界，促進反思，重新認識自我，豐富自我的一個有效的窗口」との論旨を展開している。【札幌大學総合論叢】第25号，2008年3月。

(6) 李若柏，鑑欣「日語強化教學方法芻議」（『日語學習與研究』1992年第2期）の論文を参照。

(7) 肖平「日語強化教學研究」（『吉林教育科學』1994年第1期）という論文の中でも，良好な日本語言語環境作りで，指導原則を以下の六点にまとめている。(1)基礎段階の講義では母語不使用の原則。(2)多コマ数の原則。(3)多情報量の原則。(4)多訓練量の原則。(5)「聞く，話す」力を優先にする原則。(6)文型練習と功能意念練習の相互堅持の原則。母語不使用の言語環境作りの背景には多コマ数の確保があることを物語っている。

(8) 胡玉華の二論文「コミュニケーション能力の育成を目指した中国語教育：その理論及び実践例」（『中国語教育』第5号，2007年3月），「コミュニケーションの育成を目指した授業づくり—中国語授業における「場面付き学習」の試み—」（『中国語教育』第6号，2008年3月）を参照。

(9) 旅の感想文は札幌大學孔子學院ホームページに掲載されてある。

http://www.sapporo-koshi.jp/what/2008_12_10_20:12.html

参考資料

札幌大學孔子學院 2008年秋期講座（9月～12月）サテライトで実施する講座

時間帯	10:00—11:30	13:00—14:30	15:30—17:00	19:00—20:30
月	-	中国語入門Ⅱ(A)	-	中国文化講座 「カンフー・気功演習」
火	中国文化講座 「中国語で歌いましょう」	中国文化講座 「源氏物語の女君における漢籍の影響」	-	北海道限定通訳案内士（二次面接試験） 受験対策講座 中国語中級Ⅲ
水	-	-	-	広東語入門Ⅱ 中国語中級Ⅱ
木	-	中国文化講座 「続『三国志』の時代」 「続『論語』を読む」	中国留学準備講座 (HSK6級を目指して)	中国語入門Ⅱ(B) 中国語上級
金	-	中国語入門Ⅲ 観光・ガイド中国語Ⅰ	-	中国語入門Ⅰ(A) 中国語初級Ⅰ

札幌大学孔子学院の中国語講座の開設策略について

土	中国語入門 I(B)	中国語初級 III	中国語初級 II	-
	中国語中級 I	観光・ガイド中国語 IV	北海道限定通訳案内 士受験対策講座	

プロフィール

張秀強：広東外語外貿大学東方語言文化学院日本語科講師。東北師範大学 2007 年級博士課程在学。
2008 年 4 月から一年間札幌大学孔子学院で教職を担当することになっている。